NEW JAPAN PHILHARMONIC SUMIDA, TOKYO 50th Anniversary 1972-2022

新日本フィルハーモニー交響楽団
2022/2023シーズン

2022
9
September

KAZUHIRO KOIZUMI

MARKUS STENZ

9

2022/2023 Season
September

新日本フィルハーモニー交響楽団9月演奏会

Contents

トリフォニーホール・シリーズ／サントリーホール・シリーズ #643　相場ひろ　1
すみだクラシックへの扉 #9　小室敬幸　7
楽員ストーリーズ㉘　中 恵菜（ヴィオラ）　13
NJP from Inside　14
NJP50周年誌…こぼれ話　齋藤 克　19
NJP 10月公演　片桐卓也の《鑑賞のツボ》　21
2022 / 2023シーズン　定期演奏会プログラム　22
室内楽シリーズ　24
「パトロネージュ・システム」のご案内　32

■特別支援企業

オリックス
鹿島
CCC
大和証券
東京東信用金庫
NOMURA
フジサンケイグループ
三井住友銀行

■特別支援団体

公益財団法人 オリックス宮内財団

特別支援企業／団体は、新日本フィルの運営を支援しています。

新日本フィルハーモニー交響楽団は、#deleteC大作戦の啓発パートナーです。

delete C

本プログラム冊子は、「deleteC」（みんなの力で、がんを治せる病気にするプロジェクト）に賛同し、新日本フィルのロゴの「C」を消す表現をしております。「deleteC」については、P.29をご覧ください。

〈ご来場のお客様へ〉
下記ご協力下さいますようお願いいたします。

Triphony Hall Series
Suntory Hall Series
2022-2023 Season
#643

9.10［土］
トリフォニーホール・シリーズ

新日本フィルハーモニー交響楽団
トリフォニーホール・シリーズ 第643回定期演奏会
2022年9月10日（土）14時00分
すみだトリフォニーホール

9.12［月］
サントリーホール・シリーズ

新日本フィルハーモニー交響楽団
サントリーホール・シリーズ 第643回定期演奏会
2022年9月12日（月）19時00分
サントリーホール

◉ベルリオーズ（1803－69）
序曲「ローマの謝肉祭」op. 9　約10分
Hector Berlioz: “Le carnaval romain”, Overture, op. 9

◉ラヴェル（1875－1937）
組曲「マ・メール・ロワ」　約20分
Maurice Ravel: “Ma mère l’oye”, Suite

Ⅰ. 眠りの森の美女のパヴァーヌ　Pavane de la Belle au bois dormant
Ⅱ. 親指小僧　Petit Poucet
Ⅲ. パゴダの女王レドロネット　Laideronnette, Impératrice des Pagodes
Ⅳ. 美女と野獣の対話　Les entretiens de la Belle et de la Bête
Ⅴ. 妖精の園　Le jardin féerique

―― 休憩20分 ――

◉ベートーヴェン（1770－1827）
交響曲第3番 変ホ長調 op. 55「英雄」　約55分
Ludwig van Beethoven: Symphony No. 3 in E-flat major, op. 55 “Eroica”

Ⅰ. Allegro con brio
Ⅱ. Marcia funebre: Adagio assai
Ⅲ. Scherzo: Allegro vivace
Ⅳ. Finale: Allegro molto

［指揮］マルクス・シュテンツ
Markus Stenz, Conductor

［コンサートマスター］西江辰郎
Tatsuo Nishie, Concertmaster

［アシスタント・コンサートマスター］立上 舞
Mai Tategami, Assistant concertmaster

■主催：公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団
■共催：すみだトリフォニーホール［9/10公演］
■特別協賛：オリックス、オリックス宮内財団
■助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
独立行政法人 日本芸術文化振興会

アラーム付時計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に鳴らないようお確かめください。
演奏途中でのご入場、場内での録音および撮影はかたくお断りいたします。

SUMIDA TRIPHONY HALL SINCE 1997

オリックス株式会社
公益財団法人 オリックス宮内財団

文化庁

Profile

©Kaupo Kikkas

マルクス・シュテンツ［指揮］
Markus Stenz, Conductor

マルクス・シュテンツはオランダ放送フィルハーモニー管弦楽団の首席指揮者（2012～19年）や、ボルティモア交響楽団の首席客演指揮者（2015～19年）、ソウル市立交響楽団のコンダクター・イン・レジデンス（2016～19年）などを含めた数々の重要なポストに就いてきた。ケルン市およびケルン・ギュルツェニヒ管弦楽団の音楽総監督を11年間（2003～14年）、ハレ管弦楽団の首席客演指揮者（2010～14年）、メルボルン交響楽団の芸術監督および首席指揮者（1998～2004年）、ロンドン・シンフォニエッタの首席指揮者（1994～98年）、モンテプルチアーノ音楽祭の芸術監督（1989～95年）なども務めた。
これまでにロイヤル・コンセルトヘボウ管、ベルリン・フィル、ミュンヘン・フィル、N響、バイエルン放送響、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管、ロンドン・フィル、ウィーン響、フランクフルト放送響などに客演。アメリカではボルティモア、ボストン、シカゴ、シンシナティ、ダラス、ヒューストン、サンディエゴ、セントルイス響、ロサンジェルス・フィルなどを指揮している。
今シーズンのハイライトはリヨン国立管、ベルゲン・フィル、バルセロナ響へのデビュー公演や、サンタ・チェチーリア国立アカデミー管、新日本フィルとの再共演などが含まれる。オペラ公演はベルリン・ドイツ・オペラ、オランダ国立歌劇場、バイエルン州立歌劇場での再演などを予定している。
シュテンツの膨大なディスコグラフィーには、Oehms Classicsからのケルン・ギュルツェニヒ管とのマーラーの交響曲全集など賞を受賞した録音などが多く含まれる。ハイペリオン・レコードからシュトラウスの「ドン・キホーテ」と「ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら」の録音は満場一致で評論家の絶賛を浴び、シェーンベルク「グレの歌」は2016年グラモフォン・アワードの合唱部門賞を受賞。
ケルン音楽舞踊大学でフォルカー・ヴァンゲンハイム氏に、タングルウッドではレナード・バーンスタイン氏と小澤征爾に師事。英国王立ノーザン音楽大学から名誉フェローシップを授与され、ドイツのノルトライン・ヴェストファーレン州から“Silberne Stimmgabel”（Silver Tuning Fork）を授与される。

Program Notes ◉相場ひろ

1972年、新日本フィルハーモニー交響楽団は指揮者小澤征爾や山本直純、齋藤秀雄の協力を得て結成された。その結成特別演奏会のプログラムを再現したのが、本日の演奏会である。

72年の演奏会は、当時欧米において破竹の勢いで活躍の場を広げていた小澤征爾の指揮によって開かれた。小澤はこの翌年にアメリカのメジャー・オーケストラのひとつであるボストン交響楽団の第13代音楽監督に就任し、その名声を確固としたものとすることになるのだが、このプログラムは、彼のカラーが色濃く反映されているように感じられる。

1959年にフランスのブザンソン国際指揮者コンクールを制覇して後に国外での活動を開始した小澤は、直後から積極的な録音活動を開始した。そのレパートリーはストラヴィンスキーからメシアンまでの20世紀近代音楽を中心とし、かつフランス音楽でみせる音彩（おんさい）やサウンドについてのセンスには定評があった。ベルリオーズとラヴェルの2曲は、そうした小澤の強みが遺憾なく発揮できる曲目として選ばれたのではないか。

しかし半世紀の時を経た新日本フィルハーモニー交響楽団にとっては、このプログラムは別の意味を持つように思う。オーケストラの合奏力は比較にならないほど向上し、明確なアイデンティティと個性も備わった。結成当時から評価の高かった管楽器・打楽器陣に加えて、歴代の音楽監督の薫陶を受けて弦楽器は強固な表現力を獲得した。シャンパンの口開けを思わせる華麗なベルリオーズの序曲に始まり、繊細な色彩を要求するラヴェル、力強い合奏が威力を発揮するベートーヴェンと、現在の新日本フィルハーモニー交響楽団のポテンシャルが存分に活かせるこのプログラムが、本日は半世紀の時の積み重ねを物語ってくれるだろう。

■ ベルリオーズ：序曲「ローマの謝肉祭」op.９

オペラのモチーフをもとに ►

エクトール・ベルリオーズ（1803～69）は「序曲」と題する管弦楽作品をいくつか遺している。その中には「海賊」のように独立した演奏会用小品として構想されたものもある一方で、「宗教裁判官」のように当初は歌劇の序曲として作曲されたものもある。1844年に書かれた「ローマの謝肉祭」の場合は、歌劇『ベンヴェヌート・チェッリーニ』のいくつかの場面の音楽を借用して構成された。具体的にはイングリッシュホルンで

歌われる歌謡的な主題や謝肉祭の高揚を歌う主題が同歌劇に由来し、効果的な管弦楽法が音楽を彩る。

[楽器編成] フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2(イングリッシュホルン持替)、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、コルネット2、トロンボーン3、ティンパニ、シンバル、トライアングル、タンバリン2、弦楽5部。

■ ラヴェル：組曲「マ・メール・ロワ」

マザーグースの童話をもとに ►

モーリス・ラヴェル(1875~1937)の「マ・メール・ロワ」は当初、友人であったゴデプスキ夫妻のふたりの幼児のためのピアノ連弾用組曲として1908年から1910年にかけて作曲された。タイトルは17世紀フランスの作家シャルル・ペローの童話集『マ・メール・ロワ(ガチョウばあさん、英語でいうマザー・グース)』に由来する。1911年、ラヴェルはこの作品を編曲して管弦楽用の組曲とバレエ音楽とを作成した。今回演奏されるのはその組曲版である。

舞曲を軸として楽曲構成 ►

ピアノ連弾用の原曲は、17~18世紀に書かれたフランスの童話に想を得ると同時に、全体の構成もパヴァーヌ、ワルツ(「美女と野獣の対話」)、行進曲(「レドロネット」)、サラバンド(「妖精の園」)と舞曲的な性格の楽曲を軸としていて、バロック時代に確立された古典組曲を思わせる体裁をとる点に特徴がある。

各曲の特徴 ►

第1曲「眠りの森の美女のパヴァーヌ」。ペロー原作の『眠りの森の美女』に基づく。

第2曲「親指小僧」。やはりペローの原作になり、口減らしのために親に森の奥に捨てられた少年が、あてもなく森の中をさまよう姿が描かれる。

第3曲「パゴダの女王レドロネット」。ドーノワ伯爵夫人の童話『緑の蛇』に基づく。妖精の呪い故に醜い顔立ちとなった王女レドロネットと、彼女に仕える魔法の磁器人形(パゴダ)の物語である。

第4曲「美女と野獣の対話」。ルプランス・ド・ボーモン夫人の童話を原作とする。ワルツのリズムに乗って、美女と野獣が会話を交わす。女の優しさによって魔法が解け、野獣は見目麗しい王子の姿を取り戻す。

第5曲「妖精の園」。緩やかなテンポによるサラバンド舞曲であり、シンプルな旋律とともに大きく高揚して全曲を締めくくる。

[楽器編成] フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2(イングリッシュホルン持替)、クラリネット2、ファゴット2(コントラファゴット持替)、ホルン2、ティンパニ、大太鼓、シンバル、吊しシンバル、トライアングル、タムタム、シロフォン、ジュドゥタンブル、ハープ、チェレスタ、弦楽5部。

■ ベートーヴェン：交響曲第3番 変ホ長調 op.55「英雄」

「天地創造」からの影響 ►

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770~1827)は師であったフランツ・ヨーゼフ・ハイドン(1732~1809)が1799年に公にしたオラトリオ「天地創造」を聴き、その壮大なドラマに深く感銘を受けて、それに匹敵する画期的な楽曲を書きたいと考えた。それを実現したのが、1802年にスケッチが書き始められ、翌々年に完成した交響曲第3番「英雄」である。

類をみない構成、楽器法 ►

この交響曲はベートーヴェンの狙ったとおり、真の意味で画期的であった。彼自身の交響曲第1、2番を含む過去の交響曲と比較して格段に長大であるのは、交響曲という枠組みがここでは大きく拡張されているからである。また楽器法の面でも、通常2本用いるホルンを3本に増強したほか、それまでチェロとコントラバスが同じ楽譜を用いていたのを排し、それぞれを互いに独立したパートとして扱うようにしたことで、管弦楽が従来以上の表現力を備えることとなった。

全4楽章の構成と特徴 ►

第1楽章　アレグロ・コン・ブリオ。「主題の提示―展開―再現」というソナタ形式によるが、従来短く済まされていた展開部が、素材の綿密な発展によって提示部の1.5倍を超える長さとなり、かつ再現部の後で第2展開部と長大なコーダを持つことで、ベートーヴェンに先立つハイドンやモーツァルトの交響曲の第1楽章と比べてはるかに長大なものとなった。

第2楽章　葬送行進曲：アダージョ・アッサイ。長調で始まる交響曲に短調の緩徐楽章を配するのは当時異例であったし、さらにそれを「葬送行進曲」と名付けたことで、たいへん異色な楽章となっている。フランソワ=ジョセフ・ゴセックやルイージ・ケルビーニによる葬送行進曲が影響を与えたのではないかとされる。

第3楽章　スケルツォ：アレグロ・ヴィヴァーチェ。ハイドンやモーツァルト的なメヌエットを脱却した、画期的なスケルツォである。

第4楽章　フィナーレ：アレグロ・モルト。バレエ音楽『プロメテウスの創造物』終曲などにあらわれる主題に基づく変奏曲。ただし変奏は主題の低音進行のみを示して開始され、第4変奏にいたってようやくオーボエとクラリネット、ファゴットによって変奏主題が提示されるという異例な構成をとる。また第4変奏と第7変奏の後に長大なフガートが置かれるのもユニークである。

[楽器編成] フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン3、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部。

「あした」は、ナニイロ？

鹿島のしごと。
それは「あした」をつくること。
人と自然と向き合って、
よりよい毎日をつないでいくこと。
暮らしを描く、ものづくり。
無限の創造力で、彩り豊かな未来へ。

100年をつくる会社
鹿島

SUMIDA TOBIRA of classic 2022-2023 Season #9

9.16[金] 17[土]

すみだクラシックへの扉

新日本フィルハーモニー交響楽団 定期演奏会すみだクラシックへの扉 第9回
2022年9月16日(金)14時00分 すみだトリフォニーホール
9月17日(土)14時00分 すみだトリフォニーホール

◉ブラームス (1833－97)
Johannes Brahms

ピアノ協奏曲第1番 ニ短調 op.15 ＊
Piano Concerto No.1 in D minor, op.15 ＊

約50分

Ⅰ. Maestoso
Ⅱ. Adagio
Ⅲ. Rondo: Allegro non troppo

―― 休憩20分 ――

交響曲第1番 ハ短調 op.68
Symphony No.1 in C minor, op.68

約45分

Ⅰ. Un poco sostenuto – Allegro
Ⅱ. Andante sostenuto
Ⅲ. Un poco allegretto e grazioso
Ⅳ. Adagio – Più andante – Allegro non troppo, ma con brio

[指揮] 小泉和裕
Kazuhiro Koizumi, Conductor

[ピアノ] 清水和音 ＊
Kazune Shimizu, Piano ＊

[コンサートマスター] 西江辰郎
Tatsuo Nishie, Concertmaster

■主催：公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団
■共催：すみだトリフォニーホール
■特別協賛：オリックス、オリックス宮内財団
■助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)
独立行政法人 日本芸術文化振興会

アラーム付時計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に鳴らないようお確かめください。
演奏途中でのご入場、場内での録音および撮影はかたくお断りいたします。

SUMIDA TRIPHONY HALL SINCE 1997

オリックス株式会社
公益財団法人 オリックス宮内財団

文化庁

Profile

©Ivan Malý

小泉和裕［指揮］ Kazuhiro Koizumi, Conductor

東京藝術大学指揮科にて山田一雄氏に師事。第2回民音指揮者コンクール第1位受賞。第3回カラヤン国際指揮者コンクールに第1位入賞。その後ベルリン・フィルを指揮してベルリン・デビュー。
ベルリン・フィル、フランス国立放送管、ウィーン・フィル、ロイヤル・フィル、ミュンヘン・フィル、バイエルン放送響、シカゴ響、ボストン響、デトロイト響、シンシナティ響、トロント響、モントリオール響など世界の主要オーケストラに客演、ルービンシュタイン、ロストロポーヴィチ等世界の優れたアーティストと共演し、欧米各地において精力的な指揮活動を行った。
これまでに新日本フィル音楽監督、カナダ・ウィニペグ響音楽監督、都響首席指揮者／首席客演指揮者／レジデント・コンダクター、九響首席指揮者、日本センチュリー響音楽監督、仙台フィル首席客演指揮者などを歴任。
現在、都響終身名誉指揮者、九響音楽監督、名古屋フィル音楽監督、神奈川フィル特別客演指揮者。21年、『邂逅の紡ぐハーモニー』が中経マイウェイ新書から出版された。

©Mana Miki

清水和音［ピアノ］ Kazune Shimizu, Piano

完璧なまでの高い技巧と美しい弱音、豊かな音楽性を兼ね備えたピアニスト。
ジュネーヴ音楽院にて、ルイ・ヒルトブラン氏に師事。1981年、弱冠20歳で、パリのロン=ティボー国際コンクール・ピアノ部門優勝、あわせてリサイタル賞を受賞した。これまでに、国内外の数々の著名オーケストラ・指揮者と共演し、広く活躍している。室内楽の分野でも活躍し、共演者から厚い信頼を得ている。また、ソニーミュージックやオクタヴィア・レコードなどから多数のCDをリリースし、各誌で絶賛されている。
2011年には、デビュー30周年を記念して、ラフマニノフのピアノ協奏曲全4曲などを演奏。14～18年は年2回のリサイタル・シリーズ「清水和音 ピアノ主義」を開催。16年4月からは、年6回の室内楽シリーズ「芸劇ブランチコンサート」を開始するなど精力的な活動を続けている。デビュー40周年となる21年春には「3大ピアノ協奏曲の饗宴」を開催。秋には「清水和音 ピアノの祭典」と題し、ソロから室内楽まで4時間を超えるプログラムで大きな存在感を示した。桐朋学園大学・大学院 教授。

Program Notes ◉小室敬幸

ブラームスがシューマン夫妻と出会ったのは1853年9月のこと。ロベルト・シューマンはそれから1ヶ月後にかつて自らが創刊した『音楽新報』に「新しい道」という題の評論を寄せ、この若き才能の登場を寿いだのは有名な話――ただし、シューマンはそのなかで作品の細部を論じることはしていなかった。楽曲分析しながら細部に立ち入ってブラームス作品を初めて評論したのは、デッサウの裁判官であったアドルフ・シュープリンク（1817~93）が1862年に『音楽新報』へ寄稿した文章であるとされている。「え！素人？」と思うべからず。1700年代の半ばから作曲や演奏を職業としない人物が音楽評論をする例が徐々に増えていたのだ。

シュープリンクはブラームスの初期作品の中から5作品（ピアノ・ソナタ第1~3番、ピアノ三重奏曲第1番、ピアノ協奏曲第1番）を選び、各作品の欠点を具体的に指摘しながらも最終的には肯定的に作曲家ブラームスを評した。なかでもピアノ協奏曲第1番について「私はこの協奏交響曲を、ブラームスがこれまで発表した作品の中で最も重要なものと位置づけている。そこには、私がブラームスに求めた理想が、ほぼ完全に実現されているのだ」と（当時既に発表されていたセレナード第2番や弦楽六重奏曲第1番よりも）高い評価を与えている。

ここで「ブラームスに求めた理想」と表現されているのが、ベートーヴェン作品の後継となることだった。個人的なやり取りではそれ以前から言われていたことかもしれないが、こうして20代後半のブラームスは不特定多数の目に触れる場で、ベートーヴェンの後継者になることを周囲から求められる様になっていくのだ。

加えて、先に触れた評論「新しい道」のなかでシューマンは、ブラームスの（ピアノ・）ソナタを「ヴェールに包まれた交響曲」に喩えている。その延長線上に自らの交響曲の後継となる交響曲が誕生するという実質的な“予言”なのだが、これは若きブラームスにとって“呪い”になったという見方も出来るだろう。何故なら恩師シューマンの“予言”が外れたと外野から言われないために、最初の交響曲から傑作と評価される必要があったからである。

■ ブラームス：ピアノ協奏曲第1番 ニ短調 op.15

2台ピアノのソナタを基に ►

1854年2月27日にシューマンがライン川で自殺未遂を図るという衝撃

的事件を経た同年の4月9日、ヨハネス・ブラームス(1833~97)は友人宛の手紙の中で「2台ピアノのためのソナタ〔ニ短調〕」を書き上げたと報告している(後にピアノ五重奏曲となるop. 34bとは全く別の曲だ)。シューマンの予言を実現させるかのようにその年の夏、ニ短調のソナタは交響曲へ改作が試みられたが、完成することはなかった。1858年3月30日、遂に試演された時にはこのピアノ協奏曲へと姿を変えていたのだ。

「交響曲的」の評価 ▶

1859年1月22日に行われたハノーファーでの正式な初演では賛否が分かれたが、5日後にライプツィヒで再演された際には完全なる失敗に終わってしまう。当時の批判を要約すれば「独奏ピアノは退屈で、まるで協奏曲ではなく交響曲のようだ」というのがその理由だった。それに対して前述した1862年のシュープリンクによる評論では、ベートーヴェンの中期に書かれた協奏曲が「オーケストラと独奏楽器が対等なパートナー」になっていないと主張。本来であればベートーヴェン自身が後期にそういった作品を書くべきだったが、その代わりにブラームスが「協奏交響曲」のような形で実現したのだ……と交響曲的であることを肯定して、傑作と評したのだった。

全3楽章の構成と音楽の特徴 ▶

第1楽章は作品全体の半分近くを要する長大な楽章。冒頭に管弦楽が提示する第1主題と、ピアノだけで始まる第2主題が核となっている。伝統的な協奏曲で用いられる通称「協奏ソナタ形式」を基にしつつも、提示部や再現部でも主題が展開されていくので展開部自体は短い。言い換えれば、ソナタ形式全体を展開部にしてしまっているのだ。

第2楽章は三部形式(A-B-A')による緩徐楽章。自筆譜ではこの楽章の最初の頁に(ミサではキリストを歓迎する言葉として歌われる)"Benedictus, qui venit, in nomine Domini! 主の名によりて来るものは祝福された"と書かれていることと、1856年12月30日にクララ宛ての手紙のなかでブラームスはこのアダージョが「あなたの柔和な肖像画」であると述べていることを合わせると、作曲者の込めた思いが少しみえてくる。

第3楽章は楽譜にも銘打たれているようにロンド(形式)。冒頭のロンド主部が何度となく登場する合間に、異なる音楽(エピソード)が挿入されていく……のだが、実はそれが第1主題を長調に変奏した旋律だったりするから気が抜けない。終盤の(楽譜に書かれた)カデンツァ後は大団円へと向かってゆく。

[楽器編成]ピアノ独奏、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部。

■ ブラームス:交響曲第1番 ハ短調 op. 68

長年の構想を経て ▶

完成まで20年以上かかったと解説されることが多い作品だが、それは前述したようにピアノ協奏曲第1番の基となった「2台ピアノのためのソナタ ニ短調」からカウントした年月である。交響曲第1番に繋がる素材が最初に書かれたのは1862年で、この時に作曲されたのが第1楽章(冒頭のゆったりとした序奏の後に続く)提示部主部の始まりだった。そこから数えた実際の創作年数は1862~76年に至る15年ほどである。

交響曲完成を導いた作品 ▶

この15年の中で転機となったのが1873年、40歳を迎えたブラームスが交響曲と並んで宿願だった弦楽四重奏曲(第1~2番)と、14年ぶりの管弦楽作品である「ハイドンの主題による変奏曲」を完成させたことだ。前者では複数の主題に共通性をもたせる手法によって、後者ではひとつの主題から変奏を超えて新たな音楽を生み出していく手法によって、少ない素材から多様な音楽を生み出すことに成功。その技術を用いて完成に導かれたのが、この交響曲第1番だったと推測される。事実、翌1874年にブラームスはやっと交響曲完成までの見通しが立ったと思われる発言を残しているからだ。

全4楽章の構成と音楽の特徴 ▶

第1楽章はソナタ形式。開始の堂々とした序奏はテンポアップした主部の素材をもとに作られているので、いわば予兆。アレグロの主部で改めて第1主題が提示される。これは4つの要素が重ね合わされて構成されており、オーボエが奏する第2主題も、ヴィオラが決然と奏し始める結尾主題も、第1主題の素材からの派生で生み出されていく。展開部以外でも徹底して主題を展開していくやり方は、ピアノ協奏曲第1番の頃から一貫した姿勢だ。

第2楽章は三部形式による緩徐楽章。反復するリズムで前向きに進んでいく中間部を挟んで、再現される主部も展開・変奏されていくのがブラームスの流儀だ。

第3楽章も三部形式でテンポこそ速まるが、定形通りのスケルツォではないのが特徴。全曲で最も短く、間奏曲のような性格をもつ。

第4楽章は再び序奏付きのソナタ形式となるが、自由度は第1楽章よりも高い。予兆的な序奏を経て、第1ヴァイオリンが(歓喜の歌に似ていることでも)有名な第1主題を朗々と奏でるところからが提示部主部。序奏で登場したアルペンホルンの旋律や、低音で下行音形を繰り返す第2主題も絡み合いながら、クライマックスとなる結尾部まで主題が徹底して展開され続ける。

[楽器編成]フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦楽5部。